高付加価値観光地づくりと沖縄の魅力

～地域に息づく豊かさを未来へつなぐ～


琉球舞踊 ©OCVB

沖縄総合事務局では、観光庁が進める「地方における高付加価値なインバウンド観光地づくり事業」において、沖縄県や（一財）沖縄観光コンベンションビューローをはじめとする関係機関と連携しながら、沖縄・奄美エリアの魅力を世界へ発信する取組を進めています。

この事業は、単に高付加価値旅行者（1回の訪日旅行で100万円以上を消費する旅行者）と呼ばれる人々を呼び込むことを目的とするものではありません。地域に受け継がれてきた自然、文化、歴史、暮らしの価値を見つめ直し、その地域ならではの体験として磨き上げることで、地域への誇りや持続可能な観光地づくりにつなげていく取組です。

近年、世界の旅行者、とりわけ高付加価値旅行者の間では、豪華さや利便性だけではなく、その土地でしか出会えない本物の文化や自然、人々の暮らしに触れる旅への関心が高まっています。そのような中、沖縄・奄美エリアは、琉球の精神性や豊かな自然環境、歴史文化、そして心身の豊かさを育む島として、国内外から大きな注目を集めています。

世界の人々が価値を見いだしている沖縄の魅力とは何でしょうか。そして、その価値を最も身近に持つ私たち沖縄県民は、その魅力をどれだけ認識しているでしょうか。

沖縄は、本土復帰以降、入域観光客数は大きく増加し、観光は沖縄経済を支える重要なリーディング産業となっています。青い海や美しいビーチ、温暖な気候はもちろん大きな魅力です。しかし、国内外の旅行者が沖縄に求めているのは、それだけではありません。

旅行者が沖縄に見いだしているのは、「沖縄でしか体験できない本物の価値」です。

今、世界の観光トレンドは大きく変化しています。単に「どこへ行くか」ではなく、「その土地で何を感じ、どのような気づきや学びを得るか」という本質的な体験が重視される時代になっています。そうした視点で改めて見つめ直したとき、沖縄には世界に誇ることのできる魅力がまだまだ数多く眠っているはずです。


琉球料理 ©OCVB

健康長寿を支えてきた暮らしの知恵

沖縄は、かつて世界でも有数の長寿地域としてその名を馳せました。健康的に歳を重ねる人々が多く暮らす「ブルーゾーン」の一つとして注目され、そのライフスタイルは今なお国内外から高い関心を集めています。

特に沖縄本島北部（やんばる）には、古くから人々が自然と共生しながら暮らしてきた歴史があります。その特徴は、単に健康的な食事だけではありません。地域の人々との結びつきや助け合いの文化、日々の農作業などで自然と体を動かす生活、そして生涯にわたり役割を持ち続ける「生きがい」を大切にすることです。

さらに、沖縄には、日々の食事が体を癒やすという「クスイムン（医食同源）」や、心身を健やかにする「ぬちぐすい（命の薬）」という思想が息づいています。ゴーヤーやハンダマなどの島野菜、フーチバー（ヨモギ）などの薬草類を活用した食文化、昆布や豆腐を取り入れた琉球料理など、暮らしそのものが健康を支えてきました。

世界では近年、ウェルビーイング（心身の健康や生きがいを含む幸福な状態）やウェルネス（より良い暮らしを目指す考え方）への関心が高まっています。実は沖縄では、こうした価値観が特別なものではなく、古くから日々の暮らしの中に自然に根付き、育まれてきました。私たちにとって当たり前の暮らしの知恵こそが、国内外から関心を集める貴重な資産であり、「本物の価値」の原点なのです。

自然とともに生きる沖縄の精神文化

沖縄の価値を語るうえで欠かせないものが、自然と共生する中で育まれてきた精神文化です。

現代社会では、便利さと引き換えに、人と人、人と自然とのつながりが希薄になりつつあります。そのような中で沖縄の文化は、「人は自然の一部として生かされている」という普遍的な価値観を体現しています。

その根底にあるのは、万物に神が宿るとする自然信仰です。沖縄の人々は、集落の聖地である「御嶽（うたき）」を大切に守り、海の彼方にあるニライカナイという理想郷から豊穣がもたらされると信じてきました。自然の恵みに感謝し、日常的に手を合わせる「ウートートー（祈り）」の習慣は、自然に対する深い畏敬の念の表れにほかなりません。こうした自然との調和は、人間関係のあり方にも独自の美学をもたらしました。他者を思いやる深い優しさである「チムグクル（肝心）」や、「イチャリ

バチョーデー（出会えば皆兄弟）」という言葉に象徴される寛容な精神は、厳しい自然環境や歴史をともに生き抜くための、シマ（集落）の知恵でもありました。

これは単なる伝統文化ではありません。現代社会を生きる多くの人々の共感を呼ぶ「心の豊かさ」や「自分らしく生きるためのヒント」を示しているのです。沖縄の文化に触れることは、人間本来のつながりを取り戻す旅でもあるのです。

やんばるが伝える豊かな自然の価値

世界自然遺産に登録されたやんばるをはじめとする沖縄の自然環境もまた、世界的に貴重な価値を有しています。

やんばるの森の最大の特徴は、その圧倒的な生物多様性にあります。日本全体の国土面積のわずか0.1％に満たない限られたエリアでありながら、そこには日本に生息する鳥類の約半数、カエル類の約４割が集結しています。そこには、ヤンバルクイナやノグチゲラ、オキナワイシカワガエルなど、世界的にも貴重な固有種や絶滅危惧種である生きものたちが暮らしており、その豊かな生物多様性は世界自然遺産登録の大きな理由の一つとなりました。

この豊かな自然は手つかずの原生林としてただ放置されてきたわけではありません。そこには、古くから森の恵みを必要な分だけいただき、薪炭や建築材として利用しながらも、決して枯渇させないように持続可能な共生を続けてきたシマ（集落）の人々の暮らしの歴史がありました。やんばるの森が今も美しい姿を留めているのは、先人たちが「自然との共生」を、暮らしの知恵として実践し、守り伝えてきた結果にほかなりません。

単なる美しい風景としてのビーチリゾートではなく、数えきれないほどの命が響き合うやんばるの森の深い緑こそ、沖縄が世界に提示できる「豊かな自然の価値」の本質です。

世界に選ばれる沖縄の魅力

このように見ていくと、沖縄の魅力は美しい海や観光施設だけではないことが分かります。

長寿の知恵、相互扶助の精神、自然との共生、独自の精神文化や自然観に加え、首里城に象徴される琉球王国の歴史文化、首里織や琉球びんがた、壺屋焼、読谷山花織などの伝統工芸、ユネスコ無形文化遺産に登録された琉球舞踊、空手や琉球料理など、長い歴史の中で受け継がれてきた価値の積み重ねこそが、沖縄ならではの魅力です。

近年、観光分野では再生型観光（地域の自然や文化を次世代へより良い形で引き継ぐことを目指す観光）が注目されています。これは、訪れた地域から何かを消費するだけでなく、その地域の自然や文化を理解し、地域とともに未来を育んでいく観光のあり方です。例えば、地元食材を使った琉球料理を味わったり、伝統工芸の体験を通じて地域の文化に触れたりすることは、地域経済への貢献にもつながります。

そして今、国内外の旅行者が求めているのも、こうした「本物」に触れる体験です。沖縄が持つ価値は、決して過去の遺産ではなく、現代社会においても多くの人々の共感を呼ぶ可能性を秘めています。


読谷山花織 ©OCVB


焼物 ©OCVB


首里城


紅型 ©OCVB


やんばる国立公園 ©OCVB


空手 ©OCVB

沖縄の価値を未来へつなぐために

この世界に誇るべき「本物の価値」を未来へつないでいく主役は、他ならぬ私たち沖縄県民自身です。

沖縄の豊かな文化や自然を深く知り、誇りを持って次の世代へ継承していくことは、単なる観光振興の枠を超え、この地域の未来を豊かに創り上げることに直結しています。

沖縄の価値は、決して遠くにあるものではありません。祖先から受け継いできた日々の暮らしの中にあり、地域に息づく祭りの中にあり、美しく広がる森や海の風景の中に確かに存在しています。また、２０１９年の火災から着実に復元が進められている首里城の歩みが見せるように、沖縄の歴史や文化は、多くの人々の熱い思いによって守られ、未来へ受け継がれていくものです。

いま一度、足下にあるその無二の魅力を見つめ直し、「沖縄にしかない本物の価値」を県民一人ひとりが再認識することが大切です。私たち自身がその価値に改めて光を当て、次の世代へ自信を持って引き継いでいくことこそが、これからも国内外の人々を惹きつけ、世界から選ばれ続ける沖縄の未来を切り拓く力になるのではないでしょうか。

▼お問合せ先
運輸部 観光課
☎０９８-８８６-１８１２